

心理學讀書會

二月五日(金)後三時より研究室に於て

ピアージェの子供の世界觀について

童話と童話想像

二月十二日(金)後三時半より研究室に於て

感情と嗜好

精神病者に於ける錯覺と幻覺について

精神作業の一研究

藤澤 成太君
福江 篤彦君

山名 遠君

吉見 恒雄君

若園 隆夫君

心理學豫餞會

二月六日(土)後六時四條下る對山閣に於て

倫理學豫餞會

三月十六日(水)後六時圓山鳥岩に於て

教育學豫餞會

二月四日(木)後六時より圓山高臺寺一休庵に於て

ヘーゲル哲學と辯證法

田邊 元著

『あらゆる哲學は其時代の哲學である』「如何なる哲學者も民族と時勢の子であつて、自己の本質たる普通精神を唯自己の立場から自覺するに止るが故に、必然に自己の制限を脱することが出来ない、前代の哲學の原理は勿論永遠にして現代の精神もそれに於てあるのであるが而も現代は前代を超えて一層豊富に規定せられた概念を宿すものであるから、現代の精神は前代の哲學をもつて満足せられることが出来ぬ、然るにそれにも拘らずなほ前代哲學への復古を企てるのは、一に此豊富なる發展の材料を思惟に由つて支配し一層深く統括する要求を果すに堪へざる無力の逃避に外ならない。」かうしたヘーゲルの考へ方はその考へ方自身がすでに百年の時を隔て、顧らるゝとき異つた意味をもつて自らに當欲まる。著者はそれに對して、次の如く述べられる。「我々の當に爲すべき所はヘーゲルの思想を其儘復活するといふ事實上不可能なる企圖に努力することなく、其免れざりし制限を超越して、唯其精神を我々の内に生かし其原理を我々自身にはたらかせて、更に現代の要求に従ひ現代の經驗を我々自ら概念的に組織する爲めに我々自身が自己の立場から思索的にはたらくことになければならぬ。斯くしてヘーゲルを媒介とし我々自身に於て現はれる所の哲學的精神が、現代に於けるヘーゲルの哲學史的理解となるのである。

る。』(九三―四頁)

本書は千八百三十一年十一月十四日の記念のために、本誌上著者が發表されし論文を骨幹として、かゝる觀點のもとにかの偉大なる哲人に對して著者の拂はれしあらゆる角度よりせられたる苦闘の記録である。そして本誌がその苦闘に對して、單なる發表の機關としてであるとは云へ、いさゝかあづかるを得し事を顧みて感なきあたはざるものがある。殊にヘーゲルの歿後百年東方の一文化の中にかゝる記念標のたつを見し事は、深い意味がなくてはならない。

本書の構成は序文に示されし如くむしろ著者の思想の發展的年代的記録とは丁度逆に配列されてゐる。最後の七は本誌上昭和二年の初めより昭和四年秋まで六回に亘つて發表されたものである。四・五・六の三篇は昭和四年より昭和六年の初までの立場である。そして一・二・三の三篇が昭和六年即ヘーゲルの百年祭にあたる一九三一年に於て著者の示された最後の飛躍であつたのである。私はこの思索發展の系列の中に著者を導きしかの「理性の狹知」を見出して深い興味をもつものである。即それは一つの辯證法的發展の中に苦闘そのものがその途を辿つてゐるが故である。

七の起稿されしは寧ろ啓蒙的動機をもつてなされた様である。著者も數年後かゝる深い體系の基礎とそれが成らうとは或は豫想されなかつたであらう。マールブルグ學派の新カント主義が當時の著者の立たれた地盤であつた。純粹論理主義の限界より生命的哲學への展望として問題が取扱はれてゐる。しかしヘーゲルの具

體的生命的解釋學が抽象的論理的側より見透さるゝことの困難はすでにカッシャーの象徴的形式が生命的領域に於て閉してゐる苦しみの如く、越え難い壁に次第に近い行かずにはゐられなかつた。その間の事情について著者自らつぶさにその序文に告白さるゝところである、數學の研究をその思索の出発點とし、リツカト學派を経て、マールブルグ學派を當時據るところとされし著者が、この壁に刻々と近づきつゝあるを感ぜられながら如何ともできなかつた心持は重い。この立場より四・五・六の三篇の傾向への飛躍はこの苦しみの死地を通してである。昭和四年の夏より秋にかけて更に六年に至るまで著者の辿られし思想的模索は常に人をして襟を正さしむるものがあつた。昭和五年の本誌上西田博士に教を乞はれた著者の心境は、西田博士の説かるゝ「絕對無の自己限定の立場が窮極に於て發出主義に導く恐なきか、哲學は斯かる絕對觀照の直觀に對應する構成を避けて、二元相對の統一化の過程的立場に留まり、絕對的なるものは唯理念として要請せられる外なきにあらざるか、」と云ふ疑問の展開であつた。この論文こそ漸く四・五・六の三篇に見る思索的苦闘の窮極的開陳であり更に大いなる劇的展開の期とも思はれる。我々はこの問を發する法機の中に、著者の所謂絕對觀念論の絕對知の境地の秘論が潜んでゐる様に思はれる。

一百年前の哲人の思索の跡づげにあつて、その求むる行爲の中に、その求めつゝある辯證的絕對知の境地を見出されし著者の心境には思惟の世界に於て洋の東西を隔てながら所謂かの二子

のほゞえみにも似る深い行爲的邂逅をこゝに見るが様である。
 一・二・三の三篇はかゝる深い飛躍より獲得されし著者の所謂辯證法的人間學の立場より、身を離してヘーゲルの絕對知に向つて移入されし新なる立場である。顧れば七に於て較々抽象的觀念論に傾きたる立場より、四・五・六に見る較々具體的唯物論に歩をよせられたる立場に至り、更にこゝに絕對的觀念論として、寧ろ即物的辯證法の立場に止揚されしこの過程は理性の狡知がそれ自ら辯證法的過程のもとに著者の思索を導きし跡づけをこゝに見るのである。

この即物辯證法の立場は、唯物辯證法の荒いぶきの中に在つて特殊の立場として今後の辯證法の觀點の一モニュメントと成るであらう。そこに著者の知識階級への嚴肅な心持をもつてせられたる指示がある。そこにこれから思想に進入らんとするもの、所謂古き觀念論に満足する能はずさりとて唯物論にも趨く能はざる進歩的にして而も抽象を避けんと欲する青年思想家にとつて、それは一つの歸着點であり、又一つの出發點とも成るであらう。

著者が示さる、辯證法的人間學に於て、問題の提出と發展の契機となりし身體性的問題は、今後それを嗣ぐものによつて道具の付托性的問題、社會的物理的集團的性格即機械の問題の轉換に對して深い指示と展望を投げ與へてゐる。更に判斷論に於ても、具體的判斷としての繁辭の判斷論に路が開かれるにあたつて、投票論或は物價論はこの領域より出發する遠き展望となるであらう。更に所謂存在と意識を超えて、内的なるもの、外化としての表現

の性格を有せるザツへな根柢とするところの即物辯證法の立場は今後の知識階級が據ることを運命づけられし研究領域として限りなき放射路をもつてゐる。

過去五年の間、本誌が一つの機關として著者の思索に與り、まで歩み來りし過去を顧みて、自ら安するものあり、謹んでこゝに敬意を表する次第である。

(紹介者中井正一、岩波書店發行、武圓八拾錢)

寄贈雜誌

哲學雜誌	昭和七年三月號
哲學改造	同 三月號
教育問題研究	同 三月號
學校教育	同 三月號
丁酉倫理會講演集	同 三月號
生理學研究	同 三月號
奈良縣教育	同 三月號
關西大學々報	同 三月號
倫理研究	同 三月號
信濃教育	同 三月號